

脱原発世界会議2012YOKOHAMA

報告書

- 企画タイトル 開会イベント ふくしまから世界へ
- 日時 1月14日(土)
13:00~14:30(90分)※会議プログラム上
13:25~15:00(95分)※実際の企画時間
- 場所 1Fメインホール
- 企画参加人数 約1,000名
- 文責 室井舞花(ピースボート)
- 登壇者
 - 野中ともよ/NPO法人ガイア・イニシアティブ代表(司会)
 - 吉岡達也/脱原発世界会議実行委員長、ピースボート共同代表
 - 佐藤栄佐久/前福島県知事
 - レベッカ・ハルムス/欧州議会議員、緑の党/欧州自由同盟副代表
 - 飯田哲也/環境エネルギー政策研究所所長
 - 風音/お囃子集団
 - ピーター・ワッツ/オーストラリア非核連合共同代表
 - 肥田舜太郎/広島被爆医師
 - モオタシム・アワームレ/ヨルダン国会議員、保健・環境委員会委員長
 - かん澤沙織/福島避難母子の会in関東
 - 富塚悠吏/福島避難母子の会in関東
- 協力のよびかけ
 - アイリーン・美緒子・スミス/脱原発世界会議実行委員会、グリーン・アクション代表
- オープニング映像提供
 - 新藤健一/カメラマン・キュレーター
 - 豊田直巳/フォトジャーナリスト
 - 森住卓/フォトジャーナリスト
 - 野田雅也/フォトジャーナリスト
 - 岩手日報、読売新聞、毎日新聞、共同ニュース、TEPCO

◆企画の中でどんなことが発表されまた話し合われたか

2日間の会議のオープニングとなるこの企画では、会議全体が目指すことを盛り込みました。それは、

- 1、福島を見つめ直し、
- 2、事故の背景を知り、
- 3、世界に学び、
- 4、過去を見つめ、

5、原発のない世界へ向けて動き出す

ということです。

開会イベントは、福島第一原発事故直後から福島で取材を続ける写真家の皆さん制作によるスライドショーで始まりました。視覚的に福島をとらえた写真の数々によって、3.11を思い返すオープニング映像後、司会の野中ともよさんから今回の震災で犠牲になった方々への黙祷が呼びかけられました。

続いて本会議実行委員長の吉岡達也から、会議開催にあたって、なぜ今「脱原発」を明確に打ち出した「国際会議」なのか、という挨拶がされました。

前半は会議の基調となる3名の講演から。一人目の登壇者、佐藤栄佐久さんは「福島第一原発事故はなぜ起きたのか」をテーマに、前福島県知事の立場として原発事故までに至る福島背景についてお話し頂きました。佐藤さんは原発を進める東電、経産省、原子力政策の体制について「泥棒と警察が同じだ」と厳しく糾弾しました。

お二人目の登壇者レベッカ・ハルムスさんは、会議前日に行われた福島視察ツアーを終え、当初予定していたスピーチ内容を会議前に大幅に変更。3月11日以降ドイツ政府が国内の半分の原発8基を止めたことを実例に、福島第一原発事故がドイツ、ヨーロッパ社会にどれだけ政治的影響を与えたのかをお話しされました。また、これだけの被害を出したにもかかわらず、なぜ日本は変わらないのか？という大きな問いかけを私たちに投げかけました。

三人目の登壇者、飯田哲也さんは、前の二人の話を受け「私たちの手で原発のない世界をつくる」ために目指していく方向性を5つのアウトラインから説明。飯田さんは、広島、長崎に続く福島の事故は日本の戦後史の中で大きな転換点になると断言。私たちはそれを引き受ける覚悟と責任が伴うとした上で、意見や立場の違う者同士が未来を見据え協力し、これまでの原子力エネルギーから自然エネルギーへ右でも左でもなく前に進むことを強調しました。

前半と後半の間には、獅子舞が登場。演じる風音は震災後気仙沼や石巻でもパフォーマンスを行っています。新年に平和を願う獅子舞を初めて見た海外から参加した皆さんも、多かつたのではないのでしょうか

後半は、アボリジニ男性のピーター・ワッツさんが登壇。世界のウランの33%をもつオーストラリアは、ウランを14カ国に輸出しており、日本もその輸出先に含まれています。ピーターさんは、福島原子力発電所でもオーストラリアのウランが使われていた事実に責任を感じている、申し訳ないと発言。また、鉱山の隣に暮らす先住民の水や土地が採掘会社によって奪われていること、採掘の過程でヒバクシャが生まれているという事実を伝えました。ウランの採掘を止めることが世界の核問題を終わらせることにつながる、と共に協力をしていくことを呼びかけました。

「原爆から原発へ」というテーマで登壇したのは、広島原爆で被爆し、戦後被爆医師として活動を続ける94歳の肥田舜太郎さん。肥田さんは、戦後被爆者がアメリカの政策によって認められてこなかったこと、内部被ばくした被ばく者に対して行われてきた差別について語りました。広島・長崎による被ばく者を医師として見つめ続けた肥田さん。今回の福島事故による被ばくの影響について「厳密に言えば日本には安全な場所はない」と述べた後、それでも長生きしていくために「たくさん食べて、たくさん眠り、運動し、良く愛し合うこと」と最後はご自身の結論をお話し頂きました。

最後の登壇者は、日本が原発を輸出しようとしているヨルダンからモオタシム・アワームレさん。原発を作ることに、国民の大半は反対していると伝えました。その理由として、国内経済の問題、原子力産業は世界の流れに逆行していること、ヨルダンは原発稼働で必要となる水を輸入に頼っており、そもそも国内には水がないことを挙げました。

開会イベントの締めくくりは、郡山市から家族で避難している小学4年生の富塚悠吏くんと、同じく郡山から家族で避難中のかん澤沙織さんからの世界へ向けたメッセージ。「大切なのは僕たちの命ですか？それともお金ですか？」という悠吏くんと、「この犠牲の上に成り立っているものは何ですか？」という根源的な問いかけが会場に来ていた全員に重く響きました。2人と共に、この会議の為に福島から駆けつけた方々約40名もステージ上に並び、2日間の会議に向けて、語る場を作ること、国や立場を越えて繋がっていくことが野中さんから呼びかけられ、開会イベントは終了しました。



(写真: 片岡和志)